

## 思春期の自我形成（自己肯定感～自信～ 自分をつくる）の道をもとめて

Seeking to follow a path of formation of affirmative emotion,  
self-confidence and self-identity in early adolescence

小川 勝一\*  
Shoichi Ogawa

### はじめに

本論文は、長野県教育問題研究会<sup>1)</sup>の調査とその『子どもたちに自信と誇りを—子どもの生活・意識中間報告』(1996)<sup>2)</sup>をもとに、思春期の自我形成の要因を再検討しようとするものである。

現在の日本では、不登校、いじめ、中退問題、モラルの衰えなど多くの問題に直面している。また南北格差の中で、識字率の低さ、乳幼児の死亡率の高さなど基本的生存の条件が不十分であり、同じ時代の世界にあって複雑な問題が起っている。しかし、いずれも現実の子どもは社会の矛盾を背負って「最善な利益」を受けることができず、国際協力もむしろ経済や軍事がその中心になっている。一人ひとりの「生きる力」は深刻な段階になっていると言わざるをえない。

現在の日本の子どもについて、「与えるものの過剰、自ら獲得するものの過少」と言われている。欲求はいろいろある、しかし自らほんとうにやりたい要求は少ない。お金によって解決する欲求が多く、経験によって解決する要求が少なくなっている。

大人と子どもの違いについて次のような調査の結果がある。

「今の青少年はあなたの子どもの時代と比べてどう思いますか？」（「平成8年度上田青少年育成に関する住民意識調査報告書」）に対して、（今の子

どもは）「幸福である」と考えている者が81%であった。「豊かな社会」の中で幸福であると考えている。しかし他方では、子どもの「自主性」（31%）、「責任感」（14%）、「根気強い」（11%）という点ではきわめて低くなっている。

自ら責任を持ち根気強く「要求する力」が弱くなり、「指示待ちの子ども」が多くなっている。指示待ち、消極的な子どもには、生き残り競争の抑圧と緊張感が深く浸透している。

「進学のこと、友達のこと、いろいろイライラすることがある。特に中3生はせっぱつまるる感じ。どこかでストレスを発散させなきゃ、おかしくなっちゃう。大人はいろいろ好きなことして発散させられるけど、子どもはどうしたらいいのかわからない。やっちゃいけないことが多すぎて……。やらなきゃいけないことも多すぎて……。本当に疲れるんだよね。甘えてるっていわれても小さいころから甘やかされて育てるんだから、急に強くなれないよ」<sup>3)</sup>

「小さいころから甘やかされて」、一方「せっぱつまって」競争を迫られ、どこかでストレスを発散させないと、おかしくなる状況になっている。しかし転換するためには熟成する時間とその時機（きっかけ）を待たなければならない。

たとえば不登校についても、「自分の本音」を出すための内面の成熟が必要であり、その時間と時機が必要であるといわれている。

\* 教授

「お父さん、お母さん、怒るんじゃなくて勇気をください。学校に行って先生に抗議するより、私に時間をください。たまにはみんなで遊びましょうよ」（前掲書）。

自分がやりたい、その気になる（勇気）ためには、「時間」をそして遊び（ゆとり）が必要なのであろう。

もうひとつの問題がある。内面の成熟とともに内面の傷を「癒す」ことが求められている。この場合も＜自（おの）ずからそして自（みず）ら＞癒すこと（自然治癒力）が重要であるが、傷を癒し、再生するということは、能動的な動きであると同時にそれを支える条件が重要である。「そっ啄同時」という言葉がある。禅宗で、「師家と弟子の働きが合致する」という。それは、放任とも依存とも教化とも違うものであり、それは、教師（親）と子どもと合致する、響き合う関係の成立（共感、共生）が今の教育の課題になっていると言ってもよい。いじめや不登校の子どもの場合も実はさらに難しい複雑な問題があるといわれている。この関係について哲学者は次のように言っている。「実は、近代ヨーロッパ語に慣れたわれわれには、動詞の能動態と受動態しか思い浮かべず、認識や行為にあっても『するもの』と『されるもの』ぐらいの区別しかできないでいますが、日本語には『生れる』とか『こがれる』といった、自発とも受け身ともつかない動詞があります（うまれるは英語は受動態、こがれるは能動態です）。古代ギリシャ語にあっても、受動相とほぼ同型でありながら、意味が能動相に近いような動詞表現があると言います<sup>4)</sup>。「中動相」という言い方があるという。このような文法的事実をわざわざ指摘するのは、近代的パラダイム「能動―受動」などの二項対立では解くことができない問題が多くなっているのである。典型的に言えば、自然を受動態、人間を能動態にして開発をした結果「環境汚染・破壊」を起こしていること、したがって自然と人間関係を再構築する課題に我々は直面していることになっている。

そして思春期の特徴である「イライラ、ムカつく」その裏にある不安、恐怖は、いわば根源的な「生き生き」と生きる力の基盤に動揺と衰えとが一つのことになっているのである。そして背景に

は、近代の土台―過剰な経済成長主義、自然破壊があると言ってよい。こうして近代の問題を越えようとしている「開発と環境保全の均衡＝持続可能な、循環型社会（人間関係）」と、そうした主体性形成の筋道が現在模索されている。いわば近代的自我形成とは違う道、近代の遺産を継承しながら、それを乗り越える自我形成の道を検討しなければならない。それは自然と人間の調和と言うような楽天的なものではない、対立とせめぎ合いの中で模索するものであろう。

私たちの調査の大きな目的は、現在の思春期の困難を越える内発的な成熟（その気になる、自己肯定感、自信）を促す契機、そして自己肯定感から主体性形成とそれを支える人間関係をつくる展望を検討すること、であるが、それは一直線のような成長・進歩ではない。自己否定、劣等感をバネにすることも含めて、対立とせめぎ合い・支えあう関係の成立を模索しようとするものである。

しかし子どもの現実を直面すると、親（教師）と子どもの基本的な問題に戻される。「ああ、親は自分のことをしっかりみていてくれるんだな。」「担任の先生は私の苦しみに共感してくれている。」と感じるだけで、いじめられている子は、気持ち随分軽くなることがある。両親が受け止めてくれた喜びと充実感は、いじめからの脱出を具体的方法で教えなくても、今ある状況を相対化し、自分を見つめ、自信を回復し、一人でのりこえていく力（パワー）になることがある。そういう力を与えるのが大人の責任であり、本当の＜愛情＞ではないか。そしてそれをどう蘇生することが出来るだろうか？

こうした切実な思いを込めて、アンケート調査の限界と問題を視野にしながら、次のような設問が作られた。<sup>5)</sup>

我々の調査は机上の議論や目的がよく分からない「学術」調査ではない。充分整理されたものではないが、子どもとの困難な教育実践と教師の相互検討によってつくられたものであった。

### 1) 調査の設問と特徴―自我形成の要因

設問の骨格は次の通り。

まず第一は、感動した体験、自分で達成した体験、仲間との関わる体験など10の設問をおいた。

自然への畏れ、感動という人間と自然との共感・共生する設問、あるいは「みんなで一つのことをやり遂げて、うれしかった」という、ともに感動する（共感・共生）設問をおいた。

第二に、父親／母親について、自分への関わり、評価（遊び、読み語り、話し合い、意見、賞賛、叱責、理解、安心などを各10の設問、同様、教師にも5の設問をおいた。その中心は、親と子で共に遊び、読み語り、話し合う関係を見ようというものである。また典型的には、「つらい時や悲しい時に、そばにいてくれると安心できる」という、共に生きる基本的な信頼関係に関わる設問をおいた。

第三は、自分について、その個性、自信を持つもの（まじめで正直、行動力、我慢、運動、音楽・芸能、勉強、目立つ、ユーモア、身体の問題、将来の可能性、信頼、本当の自分、自己選択、相手を励ます、友人など）19の設問をし、さらに「得意なもの（誇れるもの）や自信」についての設問をおいた。これにより「自己肯定感」から個の確立（主体性形成）を促す契機、文脈を明らかにしようとしたものである。

第四は、友人に関わる設問をした。共に生きる（共に成熟する）人間関係として、友人が重要で

あることは当然だが、特に我々に見えにくい「私的なグループ」（親しい仲間）についても設問をおいた。

簡単にまとめると「自分らしさ」を形成する契機とプロセスを、「自分らしさ」の要因、その土壌である体験、自分らしさを支え合う人間関係である親子と友人の4つの設問群を、小学校4年から高校3年を通じて検討するものである。

「得意（誇り）と自信」と「自分について」（自分らしさ）を合わせた20項目の設問について、各設問の関係の強弱を整理すると、いくつかの設問を包括する要因（因子）を抽出、あるいは設問の関係をつなぐものを解釈して定義することができる（因子分析）。ただその因子の仮設（→自分らしさの要因）は、小・中・高の段階では違われ、性別によっても違われ。したがって母集団を変え、母集団の特徴を考えた上、分析・解釈したうえで因子を仮設的に設定することが必要である。しかも「解釈」した因子が一人歩きする可能性がある。そこで現場の実感を通して、仮設的であるが、包括的な表現で因子のネーミングをおこなった。

結局4つの要因（因子）を仮設することができた。

20の設問項目は以下の通り。左側はその略称である。

自信	自分には得意なものや（誇れるもの）自信のあるものはありますか （小学校、選択肢：ある・あるほうだ・あまりない・ない）
1. まじめ正直	まじめで正直（選択肢：そう思う、すこしそう思う、あまり思わない、思わない 以下同じ）
2. 行動力	行動力がある
3. 苦しい我慢	苦しい事でも我慢できる
4. 運動得意	運動が得意
5. 音楽芸能	音楽や芸能に詳しい
6. 勉強できる	勉強がよくできる
7. 目立つ	目立つ方だ
8. ユーモア	ユーモアがある
9. 体に気になる	自分の体に気にいらなところがある
10. 将来伸びる	自分の能力は将来もっと伸びると思う
11. 生まれぬ方	自分なんか生まれて来なかった方がよかった
12. 信頼される	回りの人から信頼されている
13. 自分が悪い	友だちとうまくいかないと、自分が悪いのではないかと思う
14. 本当の自分	友だちの中でいつも本当の自分が出せる
15. 断れない	友だちに誘われたり頼まれると断れない
16. 自分で決める	何かをする時自分で決める方だ
17. 悲しくなる	泣いている子を見ると自分まで悲しくなる

18. 励ます出来ない 悲しそうにしている人を励ますことが出来ない

19. 友だち多い 友だちは多い方だ

小・中・高についての因子分析の結果（各因子の負荷量、バリマックス回転）

## 小学校

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
自信	. 47498	. 41527	-. 06329	. 09074
まじめ正直	. 70432 *	. 04014	. 04291	. 04552
行動力	. 65102 *	. 30538	. 06043	-. 00930
苦しい我慢	. 58063 *	. 13659	. 18048	-. 17798
運動が得意	. 43737	. 41732	-. 27095	. 18176
音楽芸能	. 37626	. 30208	. 26166	. 07494
勉強できる	. 69527 *	. 10175	-. 04155	. 01753
目立つ	. 34259	. 56185 *	. 05407	. 08028
ユーモア	. 38772	. 40705	. 14792	-. 11751
体に気になる	-. 04653	. 02981	. 59455 *	. 22128
将来伸びる	. 67970 *	. 11017	. 00568	-. 09304
生まれない方	-. 11236	-. 20347	. 32913	. 49796 *
信頼される	. 40841	. 46045	. 05253	. 03137
自分が悪い	. 08250	. 11787	. 68191 *	. 00384
本当の自分	. 07990	. 66408 *	. 11999	-. 11438
断れない	-. 04974	. 25975	. 22477	. 55173 *
自分で決める	. 43282 *	. 26793	. 09180	-. 00880
悲しくなる	. 16998	-. 02830	. 65305 *	-. 06014
励ますできない	. 06678	-. 18638	-. 15490	. 65076 *
友だち多い	. 14022	. 69529 *	-. 07345	-. 13906

## 中学校

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
自信	. 47950 *	. 28682	. 39253	-. 05955
まじめ正直	. 72550 *	-. 02619	. 09672	. 13582
行動力	. 57865 *	. 37862	. 19238	-. 08314
苦しい我慢	. 63722 *	-. 03044	. 09914	. 16827
運動が得意	. 27152	. 15291	. 48029 *	-. 08521
音楽芸能	. 13771	. 55594 *	. 15080	. 19022
勉強できる	. 68384 *	. 18537	. 00067	-. 11087
目立つ	. 23991	. 67843 *	. 25151	-. 05224
ユーモア	. 32465	. 61289 *	. 22516	. 03518
体に気になる	-. 14230	. 39474	-. 35081	. 50283 *
将来伸びる	. 59117 *	. 30480	. 13682	-. 02601
生まれない方	-. 19912	. 06314	-. 61298 *	. 17085
信頼される	. 54224 *	. 20875	. 35026	. 15731
自分が悪い	-. 02995	-. 03439	. 00944	. 72077 *
本当の自分	. 00810	. 29688	. 58997 *	. 21557
断れない	. 15109	-. 13005	. 05349	. 63439 *
自分で決める	. 27749	. 52259 *	. 00052	. 01976
悲しくなる	. 05300	. 07821	-. 02185	. 66101 *
励ますできない	. 04198	-. 32312	-. 06183	. 08285
友だち多い	. 05494	. 32086	. 71291 *	. 07247

## 高校

	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4
自信	. 55166 *	. 31633	-. 11371	. 10982
まじめ正直	. 08692	. 73976 *	. 11640	-. 05637
行動力	. 67800 *	. 26721	-. 00068	. 18562
苦しい我慢	. 17937	. 56962 *	. 14535	. 19020
運動が得意	. 50958 *	. 02578	-. 08357	. 27560
音楽芸能	. 48578 *	. 06669	. 21011	. 12407
勉強できる	. 35656	. 48311 *	-. 02414	-. 27840
目立つ	. 75406 *	-. 03333	. 02920	. 21300
ユーモア	. 75493 *	-. 00409	. 09616	. 20167
体に気になる	. 19461	-. 21481	. 58707 *	-. 12291
将来伸びる	. 53279 *	. 41882	-. 06689	-. 04152
生まれにくい	. 01634	-. 37322	. 39689	-. 37520
信頼される	. 43015	. 48485	. 14441	. 30096
自分が悪い	. 00912	. 04307	. 72920 *	. 05481
本当の自分	. 23005	. 11570	. 07866	. 62304 *
断れない	-. 07625	. 22765	. 55268 *	-. 07468
自分で決める	. 50176 *	. 17823	-. 00105	-. 01528
悲しくなる	-. 03097	. 24685	. 56569 *	. 23893
励ますできない	-. 11434	. 03460	. 06704	-. 56114 *
友だち多い	. 41605	-. 01292	. 07065	. 63798 *

全体、小、中、高、性別による因子分析を行なったが、次のような傾向がある。

ア. <まじめ～頑張る>要因 (略称「まじめ」)

「まじめで正直である」と「勉強がよくできる」は強く関係があることが多い、「苦しいことでも我慢できる」とも関係が多い。いわゆる「まじめ～頑張る」に対応。素直に、真っ直ぐに努力する、自分らしさのひとつの重要な要因です。その典型的な設問「まじめ」の比率は次の通り。

小～中～高

「まじめで正直である」(ある+あるほうだ)	全体	<39.7～37.1～50.6>
	男子	<40.3～39.9～48.7>
	女子	<38.8～34.2～53.8>

小・中は4割弱、高校生が5割。「まじめで正直である」は高校生になると比率がやや高くなっていることが特徴である。

イ. <ユーモア～ゆとり>要因 (略称「ユーモア」)

「ユーモアがある」と「目立つほうだ」は強く関係があることが多い。「運動が得意」「音楽や芸能が詳しい」と関係があることがある。

いわゆる「ユーモア～ゆとり(遊び)」に対応。

「まじめ」に真っ直ぐ進むのとは対立して、「ユーモア」、ゆとり(遊び)があげられている。その典型的設問「ユーモア」は次の通り

小～中～高

「ユーモアがある」(同上)	全体	<53.1～48.5～46.4>
	男子	<53.1～49.5～43.1>
	女子	<51.4～47.0～51.9>

小、中、高も約5割。性別も大きな違いはみえない。

ウ. <本当の自分～友人>要因 (略称「本当の自分」)

「友だちの中でいつも本当の自分が出せる」と「友だちは多いほうだ」が強く関係があることが多

い。友だちとのつきあいに「本当の自分」を出すことは、いいかえれば、自分の「ホンネ」と仲間での「常識」とのバランスがあるということであろう。当然友人も多い。

小～中～高

「友だちの中でいつも本当の自分が出せる」(同上)	全体	<64.9～61.1～61.9>
	男子	<61.3～57.0～57.7>
	女子	<68.5～65.3～68.8>

小、中、高とも女子のほうがやや高くなっています。

エ. <自分が悪い～断れない>要因（略称「やさしさ」）

「友だちとうまくいかない、自分が悪いのではないかと思う」と「友だちに誘われたり頼まれると断れない」が強く関係している。「泣いている子を見ると自分まで悲しくなる」とも関係が多い。集団から対立して自己主張をすることが少なく、その反面、集団の雰囲気強く受け入れる傾向を示す。これは集団への依存といってもいいし、「やさしさ」といってもいいと思われる。

「友だちとうまくいかない、自分が悪いのではないかと思う」(同上)

小～中～高

	全体	<70.2～77.1～75.5>
	男子	<63.2～69.4～69.3>
	女子	<79.6～85.0～85.8>

小・中・高の典型的設問の比率は、「まじめ」4割、「ユーモア」5割、「本当の自分」6割、「やさしさ」7割強。典型的な比率を比べても「やさしさ」が高くなっている。こうした集団の依存の高さと自立、自己肯定感との対立と補完の関係（場の重要な影響と主体性形成）は、後の検討の重要な課題になる。

その前に、重要な設問がある。自信にかかわる設問がある。「自分には得意なもの（誇れるもの）や自信のあるものはありますか」。そして「自信」の設問の意味を検討することともう一つ「自分らしさ」に関連する20の設問の関係を因子分析の結果によって明らかにしておく。

「得意（誇り）・自信」（たくさんある／ある＋あるほうだ）

	「小」／		「中」／		「高」	
	小4	小6	中1	中3	高1	高3
男子	72.7	74.6	53.2	59.6	51.7	60.3
女子	72.5	69.1	48.4	39.6	39.2	55.6

「得意（誇り）・自信」は、中学校に入学してすぐに（調査時期：7月）急落が起る。これは衝撃的であるが、特に女子が特徴である。女子は約70%から約50%に急落、さらに中3は約40%にまで落ちる。そして高1で40%で停滞しているが、高3になって約55%に回復する。一方、男子は中3でやや回復（60%）、そして高校入学後にまた低下（50%）し、高3では回復（60%）している。

性差では、中3に違いが強くでている、女子は20%低くなっている。

中学生、特に女子が自信（自己肯定感）が低くなっていることに一つに特徴がでている。それは

思春期の重要な特徴である。「自と他、個と社会、男と女、強さと弱さ、勝と敗、誇りと恥、その戦場であるところの身体にわれわれがはじめて出会うのは、青年期前半（思春期）においてのである。それは決して物として身体でもない、単なる生体としての身体でもない。」<sup>6)</sup>心と身体の全体が動揺していることである。

「自信」の急落は、今日のいじめ、不登校、受験競争、管理的教育の弊害という中学校の問題と対応しているが、「身体との出会い」という発達的課題（特に女子）に重い意味があるといえる。そして「自信」について、中学生の急落と高校生になると回復する傾向は、思春期の課題（「身体

との出会い」と「同姓同年輩関係」の達成（親友、親との依存から対抗の関係への移行）と重なっているのである。こうした発達の課題と社会的問題を視野におきながら、「自信」の設問と自分らしさの要因の因子（まじめ、ユーモア、本当の自分、やさしさ）の設問との関係をさらに検討する。

「得意（誇り）・自信」は「まじめ－頑張る」要因と「ユーモア－ゆとり」要因の両方が小・中・高の段階、性別を越えて、程度は違いがあるが深く関係している。

「まじめ－頑張る」と「ユーモア－ゆとり」はある面では対立している。「まじめ－頑張る」要因は、「まじめで正直である」と「勉強がよくできる」は強く関係があることが多い、「苦しいことでも我慢できる」とも関係が強いと、書いたが、「まじめ」に「我慢」しながら「頑張る」こと、そしてそれを素直に受け入れることは、親の期待でもあり、教師（学校）、社会の評価に対応している。当然「自分」と「自信」をつなぐ重要な要因になることは明らかである。

一方「ユーモア－ゆとり」要因は、ユーモア、遊び、冗談など、「まじめ」に対立し、笑いをとり「目立ちたい」という側面、さらに、運動、音楽、演劇など人間的に開放するものと関係が強くなっている。しかし教師（学校）は「ユーモア－ゆとり」の側面を評価することが弱かった（後述）。しかし「ユーモア－ゆとり」要因の周辺を詳しく考える必要がある。

高・男子の場合「ユーモア」要因は、「本当の自分」要因と関係がある。さらに中・高女子の場合、「ユーモア」要因は、「本当の自分」要因の特に「友人」と関係が強くなっている。

また「ユーモア－ゆとり」要因は「得意（誇り）・自信」と関係がある。

こう考えると、「ユーモア」要因をよく吟味していくことが必要になる。「ユーモア」を辞典などで見ると「人間などに対する同情、哀れみを含んだ情的寛容性格を有し、この点では風刺の攻撃性とは対照的である」といわれている。

「ユーモア」要因は、まじめに対立し、笑いをとり「目立ちたい」という側面を持っている。そして中・高校生にも攻撃的な風刺も多く見

えるが、この調査では、「ユーモア」と「仲間友だちの中でいつも本当の自分を出せる」と「友だちは多いほうだ」が関係があること、「やさしさ」の設問の比率の高さをみると、「情的寛容性格」との対応を相当考えてもいいのではないだろうか。

また「ユーモア」の要因が、「友人と共にやりとおす体験」、「友だちの中でいつも本当の自分を出せる」という自我形成につながる契機になっているかどうかは、後にさらに改めて検討する。

最後に「やさしさ」要因は「得意（誇り）・自信」とは関係は薄くなっている。典型的な設問「友だちとうまくいかない、自分が悪いのではないかと思う」は学校種別、性別ともほぼ7割から8割のきわめて高い肯定率になっている。当然これが主体性形成の土壌（場）であると思われる。ただ、「やさしさ」に關係する設問「友だちに誘われたり頼まれると断れない」は約6割になっている。ここからだけでは自我の確立は難しい。一方、違う文脈（「まじめ」あるいは「ユーモア」）にある設問「なにかをする時自分で決める方だ」は、「そう思う」、「少し思う」もほぼ同じ比率で、合計6割になっている。これは「自信」と関係が深くなっている。まさに「依存と自立」がせめぎ合っている状況である、依存から独立する（近代的自我）とは違う道、依存から「自立と共生」の自我形成の道が課題になっている。こう考えると「やさしさ」が「自信や自己肯定感」の方向に行くには、「まじめ」あるいは「ユーモア」のような積極的体験を持つことによって、すなわち「やさしさ」の飛躍（止場）が自我形成の重要なテーマになっていることがわかる。

## 2) 「まじめ」と「ユーモア」の比較分析

因子分析を含む多変量分析は意識を分析するための方法だが、その経過がわからなくなり、ブラック・ボックスになる結果になることが多くなっている。そこで「まじめ」要因と「ユーモア」要因の関係を分析するため、典型的な設問による類型を設定し、関連する設問とクロスする単純な分析によって解釈をおこなう。

「まじめ」と「ユーモア」ともに<「そう思う」+「少し思う」>:「ま&ユ」型  
「まじめ」<「そう思う」+「少し思う」>かつ

「ユーモア」 < 「あまり思わない」 + 「思わない」 > : 「まじめ」型

「まじめ」 < 「あまり思わない」 + 「思わない」 > かつ

「ユーモア」 < 「そう思う」 + 「少し思う」 > : 「ユーモア」型

「まじめ」 < 「あまり思わない」 + 「思わない」 > かつ

「ユーモア」 < 「あまり思わない」 + 「思わない」 > : 「XX」型

まじめ	20.0<77.6>	8.9<53.6>	22.1<50.3>
ユーモア	23.3<77.3>	10.4<57.7>	33.6<59.7>
XX	11.0<54.2>	2.6<27.8>	10.1<31.3>
全体	22.3<72.3>	9.7<50.5>	24.3<51.7>

単位：%

表1 まじめ&ユーモア類型の<規模>

	小学生	中学生	高校生
ま & ユ	25.7(56.3)	22.8(55.2)	25.4(55.2)
ま じ め	14.0(50.0)	14.2(55.6)	25.1(64.9)
ユーモア	27.3(52.1)	25.6(51.6)	21.0(60.9)
XX	32.9(53.6)	37.3(47.9)	28.4(67.3)

男子比率 (53.4) (51.6) (62.3)  
 ( ) 内は男子の比率  
 単位：%

まず、類型での男子比率は ( ) にある。調査対象の男子比率を見ると、おおよそ対応している。ただ、高校生は、男子比率が62.3%で男子にやや偏りがあり、男子の影響が反映する可能性がある。

「ま&ユ」型は小・中・高を通じて、約25%である。たんなる「まじめ」型は高校で増加した(25%)。一方、「XX」型が中学生でやや増加する、40%弱。そして高校になって30%弱で減少する。中学で「XX」型が40%いるということが検討すべき問題である。また、これが中学からの「自信」の急落にどう関わっているか。次を見たい。

表2 「自信」(ある<ある+あるほうだ>)

	小学校	中学校	高校
ま & ユ	36.9<88.9>	20.9<77.1>	36.9<69.5>

まず、「ま&ユ」型は「自信」は9割弱から7割で高くなっている。「まじめ」と「ユーモア」は対立しながら補う関係が「自信」のために必要であることがわかります。逆に「XX」型は、「自信」があるという比率は5割から3割弱で、きわめて低い。特に中、高校生の自信が低い。他の類型から見ても異常に低い。しかも「XX」型の規模は、中学に4割弱で増加している(高校で3割弱で減少する)。

表3 苦しいことでも我慢できる(ある+あるほうだ)

	小学校	中学校	高校
ま & ユ	86.1	67.5	86.8
ま じ め	76.3	39.5	79.3
ユーモア	73.8	57.0	71.0
XX	54.3	31.0	54.9

単位：%

「苦しいことでも我慢できる」は中学では大きく減少している。特に「まじめ」型は、「苦しいことでも我慢する」が急落している(76.3→39.5)。全体は、「まじめと正直」は「我慢」と関係が多くなっている。ところが、現在いわゆる「まじめ」では緊張感に耐えることが難しく、「イライラ」「ムカムカ」を抑えることができにくい状況になっていることが、この調査の結果で表れている。これは、典型的な「いじめ」「不登校」での、優等生、完璧主義の問題とも対応している。一方、「ユーモア」要因には抑圧を越える反発力、気分を変えるもの(ユーモア)、人間的な生き生きとする契機(運動、演劇、音楽など)があると思

われる。また、たんなる「まじめ」型の急減と驚くべき回復(76.3~39.5~79.3)も眼に惹く。全体に「我慢」が低下していますが、特に「まじめ」型が急落、回復をしている理由を考えたい。「まじめ」の設問の比率が高校で増加していることを再確認したい。

小:39.7(女:38.4) 中:37.1(女:34.2)  
高:50.6(女:53.8)

「まじめ」型の規模も同様に増加している。

小:14.0 中:14.2 高:25.1

また「まじめ」型の「自信」を再検討する。「自信」(「ある+あるほうだ」)の比率は、中から高では停滞しているように見える。

小:77.6 中:53.6 高:50.3

しかし、「ある」だけの比率を見ると回復の傾向がある。

小:20.6 中:8.9 高:22.1

また、女子の「ある+あるほうだ」の比率は高校(高3)で回復の傾向が見えることが出来る。

小6:69.7 中1:48.4 中3:39.6 高1:39.2 高3:55.6

「まじめ」、「自信」に関わる設問ではほぼ同じ傾向が出ている。中学生の「まじめ」型の「我慢」の急落と回復は、「まじめ」と「勉強」を媒介するものとして「我慢」が強い抑圧(たとえば「競争=管理」選抜過剰)を越える程度になっていること、それが高校の状況のもとで、回復することは、「自分づくり」の一つの転回になっていることが推測できる。「自信」、「まじめ」、「我慢」は<回復>するといったが、むしろ「自分」を見直し、「自分」を<つくり直す>ことになっていると思われる(勿論、一直線な過程ではないが)。中学とは違う学習と生活の変化、進学、就職も多様な選択の中で、進路選択の再検討、アルバイト体験、さらに性の成熟を含む発達段階、人間関係の変化(思春期における変化)等々、「まじめ-我慢」の様相は、中学と高校ではかなり違いがあることが推測できる。中・高の接続については、試験のような形式的な関係ではない、一人ひとりの進路意識(自分の生き方)の成熟・転回を支える教育の内容、制度、地域社会を含めた進路選択のシステムの全面的な検討が必要ではないだろうか。

次に「勉強」について比較したい。

表4 勉強がよくできる(ある+あるほうだ)

	小学校	中学校	高校
ま & ヨ	66.2	51.0	33.8
ま じ め	55.7	35.4	20.8
ユーモア	31.2	22.6	15.0
XX	18.0	8.9	9.0

単位: %

たんなる「まじめ」型は、勉強ができる比率は高いが、小学校から中学校の「勉強」は他の類型より低下している。さらに学校が進むと、「まじめ」型と「ユーモア」型との差も少なくなっている。現在の我慢ができないほど強い抑圧がある状況では、改めて「ユーモア」の要因はかえって重要であることが浮び上がっている。「ユーモア」要因にあるゆとりが自分を支えることがある。また、中・高校生になると、「ユーモア」要因は、友だちとのつきあいを媒介にして「本当の自分」要因につながっているといったが、そこで、4類型で、いくつかの関連する設問を比較検討したい。

表5 学校生活は楽しいですか(楽しい+どちらかという楽しい)

	小学校	中学校	高校
ま & ヨ	54.0	56.8	41.7
ま じ め	48.5	40.3	27.0
ユーモア	45.0	48.3	35.1
XX	39.0	36.3	23.8

単位: %

たんなる「まじめ」型、「XX」型は、中学校になると「楽しい」比率は低くなっている。逆に「ま&ヨ」型、「ユーモア」型は比率をわずか高めることになっている。中・高校生になると「学校の楽しさ」は「ユーモア」要因のほうが重要な役割を持つことがわかる。

表6 (先生が) あなたのことをほめてくれたり、励ましてくれる(そう思う+少し思う)

	小学校	中学校	高校
ま & ヌ	83.3	76.5	52.6
ま じ め	82.2	66.1	51.5
ユーモア	77.1	57.2	39.4
XX	70.9	48.3	36.7

単位：%

たんなる「ユーモア」型、「XX」型は教師からの評価をあまり受けていない。教師は「ユーモア」を評価する力(あるいは体質)が弱いということ、あるいは教師にある「ユーモア」が少ないこと、したがって評価することができないことが今回の結果に表れたものと思われる。

表7 悩みを相談できる友だちはいますか(いる)

	小学校	中学校	高校
ま & ヌ		85.4	82.8
ま じ め		74.9	73.8
ユーモア		80.8	85.2
XX		72.3	67.3

単位：%

表8 友だちの中でいつも本当の自分を出せる(そう思う+少し思う)

	小学生	中学生	高校生
ま & ヌ	81.0	78.2	76.8
ま じ め	68.4	58.3	54.4
ユーモア	65.5	66.6	71.7
XX	48.8	47.8	48.7

単位：%

表7、表8を見ても、たんなる「まじめ」型、「XX」型は相談する友だちの比率が低い。それ

以上に、「本当の自分」を出す比率が低い。中学の「XX」型は、4割もいること、「誇り・自信」が動揺し、我慢できない(イライラ、ムカつく)、そして「本当の自分」を出すことがまだできない状況は深刻である。その中で自分を癒す契機はどこにあるのであろうか。

表9 (母親) つらい時や悲しい時に、そばにいてくれると安心できる(そう思う+少し思う)

	小学生	中学生	高校生
ま & ヌ	85.8	70.4	65.6
ま じ め	77.1	57.0	56.0
ユーモア	76.9	54.6	50.2
XX	66.7	50.5	40.7

単位：%

「ま&ユ」型は「安心」の比率は大変高くなっている。一方「XX」型は、「安心」についても低い。「XX」型のような自信のない子どもこそ、つらい時にそばにきてくれる者、居場所が必要だと思われる。「そばにいる時の安心」の意味は、後の「自信」と「安心」による比較検討がある。また「まじめ」型は友だちとの関わりの薄さがあるが、家庭における「安心」の比率は比較的にな高くなっている。ただ、もし親との「安心」の関係が薄くなった場合、「まじめ」型が抑圧の耐えることが難しいことが結果に出ていたが(表3)、まさに「我慢」ができなかった時、「安心」の逃げ道がない場合、「不登校」あるいは「切れる」など様々な問題が起こることは当然であろう。

表10 自然のなかで感動した体験はありますか(何回もある+少しはある)

	小学生	中学生	高校生
ま & ヌ	40.4	42.9	54.0
ま じ め	26.6	28.3	37.7
ユーモア	35.6	35.1	45.1
XX	22.4	22.7	26.6

単位：%

「ま&ユ」型、「ユーモア」型は「自然」についての感動体験の比率は高くなっている。「ユーモア」は、人間性（人間の自然）の回復（ルネッサンス）と対応するといわれるが、自然との親和性が、この結果にマッチしている。そして逆に、自然と体験を通じて「ユーモア」（ゆとり）を高めることが出来ることが示唆されている。

表11 みんなで一つのことをやりとげて、うれしかったことがありますか（何回もある＋少しある）

	小学生	中学生	高校生
ま & ユ	51.2	63.0	62.1
ま じ め	38.1	40.8	38.0
ユーモア	40.1	48.2	52.9
XX	25.3	32.9	30.9

単位：％

「XX」型、「まじめ」型は比率が低い。極端に低いと考えられる。

また自然についての体験と同様に、「仲間の達成体験」は「ま&ユ」、「ユーモア」型の比率が高くなっている。そして達成体験についても「ユーモア」の影響は強いことが分かる。改めて自信を支える「体験」についても、「ユーモア」の役割が重要であることがわかる。

3) 「得意（誇り）・自信」と「母親・安心」による類型比較

同じ方法で類型を設定する。

「自分には得意なものや自信のあるものがありますかある＋あるほうだ>かつ（母親が）つらい時や悲しい時に、そばにいてくれると安心できる

<そう思う＋すこしそう思う>  
：自信<安心>

「自信<あまりない＋ない>かつ安心<そう思う＋すこしそう思う>」：<安心>

「自信<ある＋あるほうだ>かつ安心<あまり思わない＋思わない>」：<自信>

「自信<あまりない＋ない>かつ安心<あまり思わない＋思わない>」：YY

表12 「自信」、「安心」の類型の規模

	小学生	中学生	高校生
自 信 <安心>	57.7(50.8)	30.8(52.2)	28.5(63.2)
<安心>	18.0(46.6)	25.9(39.5)	24.4(47.9)
<自信>	14.9(70.4)	20.1(66.8)	23.5(71.2)
YY	9.4(59.8)	23.1(50.3)	23.6(67.8)

男子比率 (53.8) (51.4) (62.4)  
( )：男子比率  
単位：％

男子比率は、調査対象の比率をみると、「自信<安心>」型、「YY」型はおおよそ対応している。一方、たんなる「安心」型は女子の比率が高い。たんなる「自信」型は、男子の比率が高い。この性差の影響を頭におきながら、比較分析をしたい。

まず、小学生から中学生へ、激しい変化がある。「自信<安心>」型が急落（6割弱から3割に半減）、「YY」型が急増（1割から2割に倍増）。たんなる「安心」型、たんなる「自信」型も増加した。そして、中学校から高校でほぼ「横這い」になる。こうした中学生への激変と高校生への「安定」は、「自分らしさ」の形成、「自立」への過程である思春期の一つの表れであると思われる。言葉を変えれば、「自分くずしと自分づくり」の過程であろうが、これをさらに検討したい。

まず、「安心」に関わる設問と「理解」の対応と、父親の「安心」との関係をみたい。

表13

（母親）あなたの気持ちを理解してくれる（そう思う＋少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	91.3	90.3	91.6
<安心>	87.2	84.1	84.9
<自信>	48.5	50.0	44.7
YY	49.1	34.2	40.8

単位：％

表14

（父親）つらい時や悲しい時に、そばにいてくれると安心できる（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	73.0	65.6	70.9
<安心>	66.8	54.1	54.3
<自信>	11.4	7.8	9.0
YY	11.6	4.3	4.7

単位：％

「つらい時や悲しい時そばにいてくれると安心する」ことと「気持ちを理解してくれる」こととほぼ同じ関係になることがわかる。一方、母親に「安心」の関係がない場合（「自信」型、「YY」型）、父親の「安心」の関係はまったくなくなっている（表14）。また母親に「安心」の関係がある場合、5割から7割は父親も「安心」の関係を持っている。母親の「安心」は、父親を含め「親子の関係」を支える重要な役割になっていることが分かる。

表15

学校生活は楽しいですか（楽しい）

	小	中	高
自信<安心>	51.8	58.5	41.6
<安心>	35.8	41.5	30.3
<自信>	49.1	40.5	31.7
YY	29.9	32.6	20.6

単位：％

表16

悩みを相談できる友達（いる）

	小	中	高
自信<安心>	82.6	89.6	85.9
<安心>	77.3	77.1	78.7
<自信>	72.2	76.1	76.9
YY	58.8	64.1	64.4

単位：％

「自信」型を越えて、「自信<安心>」型が「学

校生活の楽しさ」の比率が高くなっている。対極にある「YY」型は、当然比率は低くなっている（表15）。さらに、学校生活の重要な要因、友人（「悩みの相手」）は「自信<安心>」型が8割から9割になっている。逆に「YY」型の比率は低くなっている。また「安心」型、「自信」型は、中、高では、ほぼ同じ比率になっている（表16）。つぎに、「自信」を形成する経験について比較する。

表17

自然の中で感動した体験（何回もある）

	小	中	高
自信<安心>	37.2	40.4	58.8
<安心>	22.1	27.9	32.9
<自信>	30.5	30.8	43.4
YY	15.9	22.4	24.0

単位：％

表18

読書で感動し体験（何回もある）

	小	中	高
自信<安心>	38.8	42.4	43.0
<安心>	23.0	32.1	33.6
<自信>	19.6	32.8	37.2
YY	18.5	26.7	23.3

単位：％

表19

みんなで一つのことをやり遂げて、うれしかったこと（何回もある）

	小	中	高
自信<安心>	47.4	61.3	65.8
<安心>	26.5	40.8	40.8
<自信>	31.2	47.1	51.2
YY	16.7	25.1	20.8

単位：％

表20

難しい問題を解決するために、相手と話し合いや交渉した経験（何回もある）

	小	中	高
自信<安心>	58.9	44.1	50.9
<安心>	28.7	24.4	26.8
<自信>	46.2	30.5	35.2
YY	36.4	19.9	19.4

単位：%

「自信<安心>」型は、感動した体験は多くなっている。逆に「YY」型は少なくなっている。その中間に「安心」型、「自信」型がある（表17、18）。しかし、達成経験になると「安心」型と「自信」型には違いがはっきり表れている。「YY」型は達成経験がきわめて少ないことが表れている（表19、20）。「自信」や「安心」をつくる土壌である「感動」や「達成」経験が重要であることがわかる。あるいは「自信」や「安心」につくることができないで、「もがいていること」が推測することが出来る。「自信」を形成する二つの要因を比較してみる。

表21

まじめで正直である（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	49.6	55.6	65.8
<安心>	25.7	27.5	50.9
<自信>	36.7	41.6	51.4
YY	15.0	20.4	33.9

単位：%

表22

ユーモアがある（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	63.0	67.7	63.0
<安心>	40.3	34.2	37.6
<自信>	54.3	58.6	52.3
YY	22.8	29.2	28.8

単位：%

「まじめ」「ユーモア」について「自信<安

心>」型は、「自信」型の比率以上にさらに高い比率になっている。一方「YY」型は小から高まで低迷している。「まじめ」や「ユーモア」を出すことが出来ない、「自信」も持てない、悪循環があると思われる。また「安心」型は、高校生になると「まじめ」の比率が高くなって、「自信」型と肩を並べている。「ユーモア」はかなり低くなっている。「安心」型は、家庭での居場所を持ち、悩みの相手の友人も持っている。高校生になって「まじめ」の比率が高くなっている（表21、22）。これからは、「ユーモア」（ゆとり、遊び）を含め多様な体験を身につけることによって、「自信」を高める可能性があると思われる。

表23

泣いている子を見ると自分まで悲しくなる（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	41.5	46.5	56.1
<安心>	39.1	45.1	51.7
<自信>	23.2	29.4	36.9
YY	22.5	36.3	33.8

単位：%

表24

仲間の中で本当の自分を出す（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	73.3	77.0	72.7
<安心>	53.9	54.3	60.3
<自信>	60.5	61.7	66.4
YY	37.7	46.2	48.4

単位：%

表25

自分の能力は将来もっと伸びると思う（そう思う+少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	71.4	75.0	73.0
<安心>	36.2	47.3	37.0
<自信>	59.3	67.0	62.4
YY	35.5	29.3	31.1

単位：%

表26

何かをする時自分で決めるほうだ（そう思う＋少し思う）

	小	中	高
自信<安心>	68.4	76.1	83.0
<安心>	47.0	49.8	64.1
<自信>	57.7	70.5	78.4
YY	40.0	52.4	60.4

単位：％

表27

卒業後の進路について、はっきりした希望を持っていますか（いる）

	中	高
自信<安心>	67.1	71.5
<安心>	45.9	44.7
<自信>	68.2	65.8
YY	39.9	43.0

単位：％

「安心」型は「泣いている子を見ると悲しくなる」の比率が高くなっている。やさしさがあると思われる（表23）。そのやさしさの共感を裏にして、「仲間の中に本当の自分を出す」比率はまだ低い比率になっているが、自分を出す可能性はないわけではない。「安心」型は高校になると「まじめ」の比率を高めている（表21）。ただ「やさしさ」と「まじめ」を通じて「自信」、「自分らしさ」を形成するためには、多様な体験が必要であることも前述により明らかである（表17～20）。具体的な体験がなければ、自分の将来性への「自信」、自ら決める力を持つことが難しいことも明らかである。「安心」型は「将来性」も「自分で決める」の比率は大変低くなっている（表25、26）。また「卒業後の進路について、はっきりした希望」が少ない（表27）。「安心」型には女子の比率が高いことも影響していると思われるが、閉塞した社会に安住する反面、自分の進路の希望、将来への可能性の比率の低さ（表25、27）を重ねると、そこには「イライラ」している側面を推測することも出来る。

「安心」型が、やさしさ、「安心」を基盤にしたから自分らしさを形成する道を模索するためには、「ユーモア」を含めた生き生きとした人間的な活動、感動や達成の体験、将来への展望を拓きながら、「イライラ・ムカつく」など衝動的な行動を越えていくことが重要であろう。またそれに対応する教育実践を具体化することが必要であろう。

最後に、今回の調査に明らかにした「ユーモア」の意義について、次の文章は示唆的である。

「<ユーモアの感覚>も<共通感覚>の考え方から捉らえなおされる。すなわち、英文学の特色の一つにユーモアというものがあるが、ユーモアの正体は《話し相手の立場、あるいは共通感覚の鏡に自分を写して、その立場からもう一度自分を振り返るところから生まれるものです。話し相手を忘れた時に、話はいつの間にか変にクソ真面目になっています。》（中略）《自他の共通感覚の欠如を感じ取った瞬間に吹き起る気質的突風》だ<sup>7)</sup>。

思春期の困難を解く二つの筋、「まじめ」と「ユーモア」の関係は、それと対応することが出来るのか、さらに詰めて検討が必要であると思っている。すなわち調査による「ユーモア」の筋には、ある人間を解放する契機、「共通感覚」とつながっていると思われる。共通感覚は次のように説明されている。中村雄二郎はたとえばカント（『判断力批判』）を援用して書いている。「共通感覚とは、その反省において他の全ての人々のことをア・プリオリに顧慮する能力であり、そのためには我々はどうしても、自分自信を他者の立場におく必要がある」。自分自信を他者の立場におく（追体験）こと、相手について共感する・同感することはア・プリオリな根源的な力であるとも言っている。「共通感覚はアリストテレスの昔から、五感を貫ぬく統合するものであるだけでなく、時間や空間を知覚し、想像力を働かせ、感性和理性と結ぶものであった。すなわちそれは、科学と生、理性と感性、概念とイメージが分裂する以前のものであった。ということはそれが時代的に先立つものであるというだけでなく、いっそう根源的な知であるということである」<sup>8)</sup>

「共通感覚」は五感を貫く統合するものであ

る、と言っているが、共通感覚の基礎、基体は「身体感覚」であり、その中軸に「触覚」である、と言う。近代の視覚中心、視覚独走（写真、映画、TVなどをみよ）に対して、「苦しみ」「傷み」（パッション）は「触覚」「身体感覚」よって起ってくると言う。これは人と人とをつなぐ根源的な感覚〜知であろう。

こうして思春期の自我形成の過程にある二つの筋、「まじめ」と「ユーモア」は中村の「共通感覚」の問題とある程度対応している。あるいは「近代の知」と「ポスト近代の知」とのせめぎ合い（対立相補性）と対応していると考えられる。この調査の再検討の意味は、まさにこうした課題（本論文の「はじめに」書いた、2項対立の近代では解きにくい問題、近代を継承しながらそれを乗り越える自我形成の課題）の入口を切り開く可能性を提起しようとしたものであった。<sup>9)</sup>

(2000. 9. 28 受理)

#### 注

- 1) 長野県教育問題研究会は、県下で学力論議が交わされ、今後の教育の在り方が問われる中、1993年、県教組、高教組、私教組共同で運営に責任を持つ自主的研究組織で、県民の願いに答える教育の在り方を探ることを目的として結成された。
- 2) アンケート調査の経過  
大阪教育文化センター『21世紀をにやう子どもたち』を先行調査としている。  
小・中・高校の子どもの実態調査を数回行なった。

保健室登校の実態について、長野県教組養護教員部の実践および研究をヒアリングした。

94年度、アンケートの予備調査を行なった。

調査対象

小学校4、6年。中学校1、3年。高校1、3年（各学年約500人）

小・中学校

山間部、中間部、都市部の学校からクラスを抽出。教室で調査。

高校

普通科、職業科、全日制、定時制、地域高校、私立学校など全体を反映するようにしてクラスを抽出。また山間部、中間部、都市部についても配慮した。

調査時期 1995年7月

調査全体の単純集計は『中間報告』に掲載

- 3) 尾木直樹監修、『助けて いじめ・登校拒否・自殺 中学生10606人の真実の声』、集英社
- 4) 藤本隆志、『哲学入門』、東大出版会
- 5) 子どもの内面を読み取る方法として、アンケート調査の限界と問題（管理的な結果になる）が基本的にあると思われる。こうしたアンケート調査の限界と問題については、改めて別の稿で検討したい。
- 6) 笠原嘉、『青年期』、中公新書
- 7) 中村雄二郎、『パトスの知』、P. 337、筑摩書房
- 8) 中村、『共通感覚論—知の組みかえのために』、岩波書店
- 9) 本論の前提として書かれた次の拙論がある。  
「共同学習と地域社会—『共通感覚』『実質合理性』『受苦性』を模索して」、長野大学産業社会学部編『地方自治とまちづくり』、郷土出版社、2000年  
「家庭の困難を社会的問題につなげるために—『パッション、パトスの知』を模索して」、雑誌『教育』、国土社、2000年、11月号